

ガラスの肖像

阿刀田高

ナスの肖像



ガラスの肖像

著者 阿刀田高（あとうだたかし）

昭和五十七年六月十五日 第一刷発行

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二
電話（〇三） 九四五―一一一（大代表） 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価 九八〇円 © 阿刀田高 昭和五十七年

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

ISBN 4-06-200003-2 (文2)

ガラスの肖像

目次

紅の火

7

夜間飛行

29

不眠療法

51

モンゴル模様

73

靴の行方

95

花の儀式

119

精霊流し

マンスフィールドを読む女

筒坂

フランス式さよなら

四角い柿

それぞれの遠景

装画
装丁
森 秀雄
熊谷博人

ガラスの肖像

紅^{べに}
の
火

「ねえ、口裂け女って、知ってる？」

白木のカウンターに肱をついたまま女が尋ねた。

「古いこと言うなあ。なんかそんなの、あったなあ」

赤鼻の男が答えた。

「髪の毛長い女がさあ、ポストの脇に立っているのよ」

「なんでポストの脇なんだ」

「べつに電柱の脇だって、鳥居の脇だってかまわないけど、とにかく夜の夜中に女がひとりポツンと立っているのよ」

「ああ」

「だれかが近づくと振り向いて、私、きれい？ って聞くの。マスクをして、わりと美人なのよね。だから聞かれた人は、うん、て返事をするわけ」

「ああ」

「そうするとマスクを取るのね」

「耳まで口が裂けてるんだろ」

「そう。知ってるじゃない」

「女の中にはいるよな」

「なにが？」

「マスク美人てのが。俺が胆石で入院した時にな、すぐ美人の看護婦が入って来てよ、こいつはいいや、って思ったら、マスクを取ると、ぜんぜん違うんだよな。あれはないぜ」

夜が更けると酒場の空気が淀んで来る。

タバコの煙とアルコールの息と、それからおでんの鍋があげる蒸気、油の飛沫などが入り混って周囲の気配が重くなる。女がいれば脂粉の匂いがそれに加わる。

酔客たちは自分の耳が遠くなつたぶんだけ声高に話すのだが、その響きもやけによく聞こえるときと、いっこうに聞こえないときとがある。空気の濃度にところどころむらがあつて、そのために音の伝わりかたに差ができるのかもしれない。

——それとも話を聞く側の気持ち次第なのかしら——

美佐子は流し場で皿を洗いながらぼんやりとそんなことを思った。

夜半近くの客は二組。

一つは、壁ぎわの席にすわつても静かに酒を飲んでいる。どういう職業の人か知らないが、常連客のひとり。いつもこの時間にやつて来て寡黙な酒を汲む。ママが話しかければほどよい話相手になってくれる。酒場の客としては一番扱いやすいタイプだろう。

もう一つは、近所の店のホステスが連れて来た中年の男たち。このホステスは、アケミさんと言つて、ほとんど毎晩のように客といっしょに飲みに来る。もう四十歳を越えているのだろう

が、精いっぱい若造りに作ってもつばら接触サービスのてい。なにかと言えば、大袈裟な嬌声きやうせいをあけて客にまとわりつく。

口裂け女の話が聞こえて来たのは、このグルーブのほうからだ。

「しかし、目だけ見ると女はたいい美人に見えるな」

「そうかしら」

「あんただって口を隠せば相当な美人になる」

「あら、私、口の恰好には自信があんのよ」

「よく言うよ。自信があるのは、もう一つの口のほうじゃないのか」

「あ、それは最高よ。見てよし、触ってよし」

「ちょっと触らせろよ」

また高い嬌声が聞こえた。男が着物の裾から手でも忍び込ませたのだろう。

「アーさん、ここはお触りバーじゃないのよ」

ママが笑いながら客をたしなめた。

夜ごとに繰り返すお馴染みの風景。取りたててめずらしいものではない。

美佐子のことさら表情を動かすこともなく皿洗いの作業を続けていた。

もう慣れっこになってしまったが、女の酔っぱらいを見るのはつらい。とりわけもう盛りを過ぎた女が、のた打つようにゆるんだ肉を男たちに預けて媚びるのは、悲しい。

——お母ちゃんもあだったのかしら——

母と二人で暮らしていた頃の、薄暗い六畳間の風景が心に昇って来る。あの頃は世界がいつも暗かった。

父と死別したのは、小学校五年のとき。父の顔ははっきりと覚えているけれど、あれは本当に自分の眼で見たものなのか、それとも仏壇の中の写真の姿なのか。

——お母ちゃんはいくつだったのだろう——

幼い娘を抱えて、初めは堅気かたきの勤めなどをやっていたらしいが、すぐにそれでは生計が成り立たないとわかった。

女学生の頃、母は夕食を終えると、いつも着飾って夜の闇の中に走り出て行く。衣裳の数もそうたくさんはなかっただろう。それを取っかえ引っかえ、なんとか華やかな姿に作って出て行くのが、子ども心にもよくわかった。

母の白い姿が路地の角から消えると、美佐子の孤独な夜が始まった。

勉強をしてテレビを見て、たまには流し場のあと片づけをして布団に潜り込む。

母が帰るのは、いつも真夜中を過ぎる頃だった。時には朝近くまで帰らないこともあった。

美佐子はまどろみの中で母の気配を感じ、それから本当の眠りにつく。

母はたいいてい酔っていた。

崩れるように布団の上に倒れ、美佐子の頬をさぐることもあった。

「いやよ、酒くさいから」

邪険じゃけんに振り払えば、母はすぐに恐縮して、

「ごめんね、遅くなって」

と呟き、あとはひっそりと寝込んでしまう。

——もう少しやさしくしてあげればよかった——

そんな後悔が今でも時折胸を刺す。

だが、まだ幼くて、やたらに潔癖けつぺきなものに憧れていた女学生は、母の生活に漠然と淫みだらなものを感じ取っていて、酔った母を許すことができなかった。

けっして母を嫌っていたわけではない。ただ、さぞかし酔客たちとだらしく戯たわむれていたでもあろう母の姿を思い、そのイメージだけが好きになれなかった。

当然のことながら、母もそんな美佐子の気持ちを知っていただろう。

しかし、母の中には、

——自分は嫌われても仕方ない。この子だけはまっすぐに育てなくては——

そんな感慨があったのではなかったか。

つまり、だらしなく酔いっぶれた母を厭いとうこと自体が、娘の生真面目さの証拠であり、母はむしろそれを育はぐくむよう努力したのではなかったか。

——苦勞ばかりして死んでしまつて——

母を想うときはいつも悲しい。

酔った女を見るのがつらいのは、おそらく、そのためだろう。

母の目論もくろみは願ひ通りに運んで、美佐子は生真面目な娘に育った。

母を失い、たった一人でこの世に生きて行かなければならなくなっても、美佐子はけっして水商売に身を置こうとは思わない。媚びを売って生きようとは思わない。

髪を無造作に束ね、三角巾をかぶり、白い上っ張りにジーパンのスタイル。皿洗いはこの服装でなんの不足があるものか。

昼は同じ服装で弁当の仕出し屋で働く。午後はフラワー・デザインの教室に通い、これはもう師範級の腕前だ。けっして美しいものに関心がないわけではない。ただ自分の身をけけばしく飾ることには興味が薄い。いづれフラワー・デザイナーとして身を立てるのが美佐子の夢だった。

「ママ、お勘定」

アケミさんと一緒に来た男たちが席を立った。

「はい、はい」

アケミは宙をかくような手つきで立ちあがり、酔客にもたれかかったまま店を出て行く。

一人が勘定を払っているあいだ、店の外でもう一人の客と唇を重ねているのが見えた。

男が手の甲で唇を拭う。

ガラス戸が締まると急に店の中が静かになった。空気は相変らず淀んでいたけれど。

「口裂け女を見たことがあります？」

ママの声が空気を割って洗い場のほうまで響いて来る。相手は当然あのもの静かな客だろう。

美佐子は聞くとはなしに耳を傾ける。

「そんなもの見るわけないだろう。ママはあるのかい？」

「まあ、だいたい。見当くらいつくわね」

「ほう」

「あたしもお酒ただこうかしら」

「飲めばいいじゃないか」

会話が少し途絶えた。

「ああ、おいしい」

反り身になつて酒を喉に流し込む様子が見えた。

ママがどういう素性の女か美佐子は知らない。関心もさしてない。

年齢は三十四、五歳。とりわけ美人でもないが、さりとて不美人でもない。一度結婚をしたようだが、ご主人がどうなったのかわからない。気性がさっぱりしていて、他人の生きかたにあれこれ干渉しないところがいい。

ママはカウンターの中の椅子にすわり直して、

「私の知っている人に若い奥さんがいたのね」

と、言う。

「ああ、口裂け女の話か」

「そう。いいでしょ」